人間にとって宗教とは ── 北東アフリカからの問いかけ

第１部　基調講演：貧困・紛争状況のなかでの宗教のゆらぎ

政治化される宗教
―スーダンにおけるイスラームとキリスト教―

栗本英世

❐はじめに

私の話は，さきほどの山形先生のお話とは，かなり違ったものになるかと思いますが，政治化される宗教というタイトルで，現在のスーダンにおけるイスラームとキリスト教という二大宗教の問題についてお話ししたいと思います。

最初に，現在のスーダンにおける宗教の政治的な意味合いを表す象徴的なエピソードを二つ紹介したいと思います。

❐ジョン・ガラン議長とバシール大統領

2005年の７月８日に，スーダン人民解放運動／スーダン人民解放軍(SPLM /SPLA)という反政府組織の議長兼最高司令官であるジョン・ガランが，22年ぶりに，いわば敵の本拠地であるスーダンの首都ハルツームに乗り込んで，スーダン共和国大統領アル・バシールに空港で出迎えられました。

その半年前の１月９日には，ナイロビで，スーダン政府と SPLM/SPLA の間で，歴史的な包括的平和協定（Comprehensive Peace Agreement：CPA）が調印されて，その結果，1983年に勃発し，数百万人の犠牲者を生んだスーダン内戦に正式に終止符が打たれたわけです。その６カ月後，この平和協定に基づいて，反政府組織のリーダーであるジョン・ガランが，首都のハルツームでスーダン共和国の第一副大統領，つまりスーダン全体のナンバーツーに就任しました。

写真①はインターネットから取ったものですが，たまたま私は，2005年７月７日にナイロビにおりまして，南部スーダンに向かう旅の途中，ナイロビのホテルでこの映像を見ました。大変印象的なシーンで，まずご覧になったらお分かりになるように，この二人の服装が対照的であります。バシール大統領は，いわゆる北部スーダン人の正装である白いガラビーヤと呼ばれる服を着ています。そして頭にはターバンを巻いているわけですね。このバシール大統領に限らず，北部スーダンの政治的なリーダーたちは，TPO によって，このガラビーヤ，軍服，それから西洋的なスーツを使い分けて，着こなしています。ガランを出迎える際にガラビーヤを身に纏ったのは，バシール大統領の意図的な選択だったと思われます。それに対してガラン議長の方は，上着なしのラフな洋服姿で，もちろんネクタイもしていませんし，かつアフリカ風のカラフルな赤いシャツを着ています。

写真①　ジョン・ガラン議長とバシール大統領
（「BBC ニュース」2005年７月10日；
'Sudan ex-rebel joins the government'. ©AP.
http://news.bbc.co.uk/2/hi/africa/4666701.stm）

この写真は記者会見の最後のシーンです。二人は取り合った手を高く掲げて，それぞれが違う言

葉を叫んでいます。何を言っているかといいますと，バシール大統領の方は，「アッラーアクバル」と連呼し，それに対してジョン・ガランの方は，「ハレルヤ」と言っているわけです。これはとても印象的な光景でした。いちおう二人は笑っていますけれども，意地悪く見れば，心からの笑いというよりは少し引きつっているようにも見えます。これはムスリムの北部人と，キリスト教徒の南部人の共存の象徴だったのか，あるいは同床異夢の皮肉な姿だったのでしょうか。また，最後に二人が唱えたのは，なぜ平和やスーダンという国家あるいはスーダン人という国民の統一性を称える言葉ではなく，イスラームとキリスト教の象徴ともいえる「アッラーアクバル」と「ハレルヤ」だったのでしょうか※。

ジョン・ガランはこの翌日，予定どおり第一副大統領に就任しました。その就任は，スーダンの南部，北部，西部，東部の違いを超えて，国民の熱狂的な歓迎を受けました。この日は，1月9日の平和協定の調印の日と同様か，あるいはそれ以上にスーダン人にとって記念すべき歴史的な出来事であったと思います。この時には，多くの人々が，宗教，民族，あるいは人種の違いに関わらず，正義と平等が保障される新しいスーダン，「新スーダン」 ── その建設は，SPLM/SPLA の長年の公式目標であった ── が実現しつつあるという夢を共有することができたわけです。

しかしこの幸福な時期は，わずか3週間しか続きませんでした。ジョン・ガランは7月31日に，不可解なヘリコプター事故のために死亡し，ニュースが伝わった直後から，ハルツームと南部の首都ジュバでは，南部人と北部人が衝突する大規模な暴動が発生しました。また，カリスマ的な指導者を失い，CPA に謳われている将来も，にわかに不透明になりました。これが，2005年7月のことであります。

※　2007年1月，包括的平和協定調印2周年の記念式典が南部スーダンの首都ジュバで開催された。バシール大統領も参加し，演説の最後に「アッラーアクバル」と叫んだが，南部人の聴衆はだれも唱和しなかった。困ったバシールが，「ハレルヤ」と言うと，聴衆は拍手と「ハレルヤ」の唱和で答えたという。当日，私はジュバにいたが，式典には参加していない。これは，参加者たちから聞いた話である。

コチュクドゥムの二つの教会

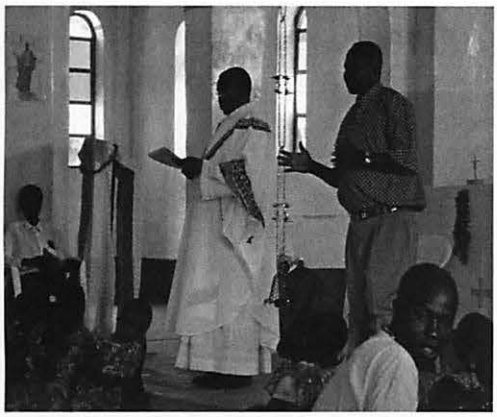
2番目のエピソードは，北部人はイスラーム，そして南部スーダン人はキリスト教によって，一枚岩的に団結しているとみなすことは誤りであって，場合によっては同じ宗教が人々を分断することもあるということを示す事例であります。

2003年のクリスマスを，私は南部スーダンの東エクアトリア州というスーダンの東南の隅，ウガンダとケニア国境沿いにある地方のチュクドゥムという小さな町で過ごしました。

ここには，二つのキリスト教会があります。カトリックと，英国国教会系の教会です。カトリックの教会は 1950 年代に建設されたひじょうに立派な石造りの聖堂を誇る教会で，この聖堂は，現在でも東エクアトリア州ではもっとも立派な建物です（写真②）。つまり，過去50年の間に，その教会よりも立派な建物は建たなかったということなんですが，その敷地内のいろんな施設は，内戦にもかかわらずよく保存されていて，そこにたたず

写真②　チュクドゥムのカトリック教会聖堂（2005年）

写真③　チュクドゥムの ECS 教会（2003年）



写真④　カトリック教会の司祭（チュクドゥム，2003年のクリスマス）

写真⑤　ECS教会信徒の行進（チュクドゥム，2003年のクリスマスイブ）

んでいますと，南イタリアかどこかにいるのではないかと錯覚するほどです。それに対してもう一つは，草葺土壁の粗末な教会に信者が集う，英国国教会系のスーダン監督派教会で，英語ではEpiscopal Church of Sudan（ECS）と呼ばれています（写真③）。

この両者は，いろんな意味で対称的です。カトリックの信者と聖職者は，地元のチュクドゥム周辺に居住しているディディンガ人と呼ばれる人たちです。それに対して英国国教会系の方は，全員がディンカ人で，この人たちはもともとこの地域に住んでいるのではなく，国内避難民として1990年代初めにこの地域に流れ込んできた人たちです。ディンカ人は，人口数百万と推定される南部スーダン最大の民族集団ですが，そのなかでもボルと呼ばれる地域から来たボル・ディンカと呼ばれるディンカ人がここに住んでいます。つまりこの二つの教会は，エスニックなレベルできわめて明確に分かれていて，お互いに交流が全くありません。

宗教的に見ましても，カトリックとECSの間には違いがあります。一言で言いますと，ECSの方がより土着化しているわけです。例えばこの教会の司祭は英語を話しません。英語が分からないんです。ディンカ語だけで説教を行っています。それに対してカトリックの方は，バチカンを中心とする組織の一部でありますから，この教区の司祭もかつてはタンザニアで奉職した経験のある人で，英語はもちろんのことスワヒリ語も堪能で，さらにイタリア語とラテン語の知識もある人であります。いずれの教会におけるクリスマスの祝祭も，熱気と平和を願う真摯な思いに溢れたものでした。

そのときに撮りました映像がありますので，少し見ていただこうと思います。これはカトリックの方ですね。2003年のクリスマスです。

これはクリスマスのミサの最初のところでして，これからこの少女たちのグループに導かれて，助祭と司祭が入場してくるわけです（写真④）。

もう一つの，国教会系の方も見ていきたいと思います。これはクリスマスの前日，クリスマスイブの行進（procession）ですね。見てお分かりのように，こういう非常に長い，杖のような十字架を持って行進するのが一つの特徴です（写真⑤）。

この二つの教会は，民族集団の違いに基づいて完全に分断されていて，お互い交流はありません。それだけではなく，この両者の間には潜在的な緊張関係があります。1999年の初頭から2003年の４年間にわたって，地元のディディンガ人と，ディンカ人を主体とする解放戦線SPLAの部隊が戦闘状態にあったからです。そのそもそもの発端は，ディンカ人の司令官に率いられた部隊の将兵が，地元のディディンガ人に対して略奪やレイプを働き，解放軍ではなく横暴な占領軍として振舞い続けていたことにあります。その結果，耐えかねたディディンガ人，SPLAのなかにもディディンガ人がいますので，ディディンガ人のSPLA将兵たちが立ち上がって，両者の間に４年にわたって戦闘状態が続きました。現在ではいちおう和解が成立していますが，緊張関係は解消していません。

内戦が終結したので，こういったディンカ人のような国内避難民は，周囲から故郷への帰還を期

待されています。しかし彼らはこのチュクドゥムという場所にすっかり定着して，畑も家畜も持っています。また，この地域の商業，ビジネスをコントロールしているのもこうしたディンカ人の人たちです。したがって，彼らは居座り続けることが予想されます。それが，今後地元民と国内避難民との間の紛争に発展するのではと危惧されています。

チュクドゥムだけではなく，この広いエクアトリア地方全体で同様の問題が発生しつつあります。とくにここでは民族集団間の違いがキリスト教の宗派の違いと重なっていて，違いが目に見える形で表現される場所になっているということを指摘しておきたいと思います。

□政治化する宗教問題

さて，私は，22年にわたって過酷な内戦が戦われたスーダンの問題は，イスラームとキリスト教の対立が原因なのではなく，かつ内戦は，ムスリムである北部人あるいはアラブ人と，キリスト教徒である南部人あるいはアフリカ人との戦いではないということを長年論じてきました。客観的な分析としては，この主張は正しいと現在でも考えています。

しかし，多くのスーダン人，および援助や外交を通じてスーダンと関わっている多くの外国人にとっては，イスラーム・アラブ対キリスト教・アフリカという認識は，主観的な現実でもあります。スーダンの近現代史のなかで，とくに22年にわたった内戦のなかで，イスラームとキリスト教の関係，およびそれぞれの宗教の宗派間の関係は，おおきく政治化されて，時には軍事的な問題とされてきました。

この報告では，この過程をたどりながら，宗教の違いが誰にとっていかに政治的な問題となっているのかを考えてみたいと思います。

ちょっと一歩離れて，布教あるいは宣教，つまり新たな信者の獲得という観点から見ますと，アフリカ大陸はキリスト教とイスラームの双方にとって最前線であると言えます。キリスト教化とイスラーム化とが，現代的な政治社会あるいは文化的な文脈のなかで，せめぎ合いながら進展しています。この二大宗教はアフリカにおいて長い歴史を有していますが，現代は新たな発展の段階を迎えているように思えるわけです。例えば信仰の復興あるいは正統な信仰への回帰であったり，土着化 ── アフリカ化と言ってもいいと思いますが ── の更なる進展といった現象と同時に，宗教というものを媒介にしたグローバルあるいはトランスナショナルなつながりとからまりあいが見られるわけです。

スーダンは，こうした現象がもっとも顕著にかつもっとも激しく表れている国の一つではないかと思います。私は，どんな宗教でも，その本質的な意味合いというのは，人智を超えた現象に対する説明の枠組みを提供することと，魂の救済の二つにあると思います。

しかし，宗教の意味合いというのはこれらに限定されるわけではありません。古今東西の歴史が示すように，宗教はしばしばある文脈のなかで強い政治的な意味合いをおびてきました。たとえば世俗的な権力の奪取を目指す，あるいは新たな政治的な秩序の樹立を目指す宗教運動もたくさんありました。時の権力者が，人々の動員や自らの体制の正当化あるいは敵の撲滅といった政治的な目的のために特定の宗教を利用することもあります。宗教的な指導者や一般信者はこうした上からの動きに乗ることもあるし反発することもあります。こうしたプロセス全体を，私は宗教の政治化と呼んでいるわけです。

1956年の独立以来，スーダンの歴代政権は，イデオロギーの基盤として，イスラーム主義と世俗主義（民族主義や社会主義）を使い分けてきましたが，1989年以降は，イスラーム主義が強くなっています。また，近代のスーダンでは，イスラーム化，アラブ化およびアラビア語化が，いわば三位一体としてひとつになって進行してきたという，特殊な経緯があります。イスラームは普遍宗教ですから，その信者であることと，ある民族や国民のメンバーであることとは関係がないはずです。しかし，スーダンでは，ムスリムになることと，アラビア語を母語とするアラブ人になることが，おおきく重なっています。このことは，イスラームの政治性を考えるうえで，重要な要因です。

さて，スーダンでは，1983年から22年間にわたって，歴代のスーダン政府と，南部を基盤とする反政府組織 SPLM/SPLA との間で激しい内戦が戦われてきました。マスメディアなどでは，この

内戦は北部のムスリムであるアラブ人と南部のキリスト教徒であるアフリカ人との間の，宗教間および民族・人種間の戦いであるといわれています。この説明枠組みは，文明の衝突論のように明快でわかりやすいので，一般にも流布しているわけです。私はそれは間違っていると思うわけですが，この問題は，間違っているといっただけでは済まない複雑なかつ悩ましい問題でもあります。その当事者の主観的なレベルでは，こういう単純な図式がリアルなものとして受け入れられているからです。

長年に及んだ内戦の過程で，政府側と反政府側の双方がこうした図式を利用してきましたので，人々にとってはますますリアルなものになっているのです。

❐外部からの支持を求めて ── 南部の場合

ジョン・ガランが指導者だった SPLM/SPLA 自体は，宗教的なスローガンを目標に掲げたことは公式にはありません。われわれはキリスト教徒の運動であって，イスラームと戦っているんだという風に公式に主張したことはありません。

しかし，欧米の政府やキリスト教の団体から支持を得るために，自らをいわゆるイスラム原理主義の専制的な政府に抑圧されている少数派のかわいそうなアフリカ人キリスト教徒として提示することはあったわけです。南部スーダンのさまざまな教会も，外部からの支持を獲得するために同じようなことを外に向かって主張してきました。それによって外部からのサポートを得るという試みは，かなり成功してきました。

それは例えば，アメリカによるスーダンのキリスト教徒あるいは SPLM に対する支援というのを見るとよくわかるわけです。アメリカにおける保守的なキリスト教系の団体が，とくに共和党の政権下で，政治的におおきな力を持っていることはよく知られた事実だと思います。こうしたキリスト教系諸団体は，開発援助や人道的援助の分野でも，きわめて活発な活動をしていて，スーダンにも多額の資金と大量の人員が投入されています。つまりアメリカで，イスラム原理主義の中央政府に抑圧されているあるいは殺されている南部スーダン人のキリスト教徒を助けましょうというキャンペーンをすると，たくさんお金が集まって世論が動くという現象があるわけです。南部スーダン人の方も，それをある意味で利用してきました。

❐政権の基盤強化のために ── 北部の場合

北部の歴代スーダン政府も，過去 30 年の間に，自らの政権の基盤の強化のために宗教を利用してきました。

過去 30 年くらいのあいだ，ナショナルなレベルで政治的指導者であった人たちを取り上げてみましょう。1969 年から 85 年まで続いた政権の指導者であったヌマイリは，最初は世俗的な社会主義者でした。当初，彼の最大の政敵は，サーディク・マフディーでした。このマフディーは，ハルツームでゴードン将軍を倒してマフディー国家をつくったマフディーの曾孫です。サーディクは，スーダンにおける最大のイスラーム教団アンサール，政党としてはウンマ党という政党ですが，その指導者です。このサーディクとヌマイリ大統領はある時「国民的和解」をします。さらに政権末期になりますと，ヌマイリは，イスラーム復興主義政党の指導者であるハッサン・トゥラビを政権に取り込んで，自らイマームと称し，1983 年の 9 月には，大統領令によってイスラーム法，いわゆるシャリアーを施行します。ちなみに，アンサールの教団のリーダーでありウンマ党の党首であるサーディクと，全然立場が違うイスラーム復興主義政党の，原理主義のリーダーであるトゥラビは，義理の兄弟関係にあります。サーディクの奥さんがトゥラビの妹であります。

さて，このヌマイリ政権は，1985 年に大衆蜂起によって崩壊しますが，１年後に複数政党制の下で比較的自由な総選挙が行われて，ウンマ党，つまりサーディクの政党が第１党になりました。第２党になったのは，民主統一党（DUP）という政党です。この政党は，アンサールとならぶ大教団であるハトミーヤ教団，これはイスラーム神秘主義，スーフィズムの教団で，この教団の政党です。そして，トゥラビの復興主義政党である国民イスラーム戦線（NIF）が第３党になりました。この選挙では，イスラーム政党が，右か左かは別にして，上位の三つを占めました。その三つのイスラーム政党の権力関係のなかで，86 年から現在までのスーダンの政治がおおきく動いていくわけです。

そのなかで，1989 年の無血クーデターによって

現在まで実権を握っているのは，トゥラビをヘッドとする国民イスラーム戦線（NIF）で，その政権の首班がバシール将軍です。このクーデターで成立したバシールとトゥラビの政権は，現在まで17年間続いています。ただし，バシールとトゥラビの関係は，1999年以降冷却化しています。

この政権は，成立直後に内戦をジハード（聖戦）と規定して，政府軍とは別の大衆防衛軍というのをつくります。このような形で聖戦の旗の下に人々を動員し，上からのアラブ化，イスラム化というのを進めていきました。大事なことは，この政権の刃の矛先というのは，SPLM/SPLAの支持者だけではなく，政権が非正統的なムスリムと見なした人たち，つまりアンサール派であったりスーフィズムのハトミーヤ派であったり，アラブ人ではないマイノリティ民族集団のムスリムの人たちにも向かいました。それからもちろん，ムスリムでない北部人たち，つまり共産主義者や社会主義者の人たちにも，宗教に名を借りた弾圧の矛先が向かいました。ですから，北部人は，エスニック的にも宗教的にも決して一枚岩ではないということ，北部のムスリムだけに限定しても政治的には決して一つではないということを指摘しておきたいと思います。

□自らのアイデンティティのために

再びスーダン南部のほうに目を移しますと，この内戦の間に，キリスト教がひじょうに普及したということは，疑いようのない事実です。人類学の分野では，南部スーダンの例えばヌエル（ヌアー）人やディンカ人の名前は，エヴァンズ＝プリチャードやリーンハートといったイギリスの社会人類学者の研究によってよく知られています。そして，彼らについては，例えば『ヌアー族の宗教』や『神性と経験』（*Divinity and Experience*）という宗教民族誌の古典といわれるようなものがあります。彼ら南部の人たちに，布教の試みはずっと行われていたんですが，彼らはつい近年までイスラームにもキリスト教にもさほど関心を示していませんでした。ところが過去10数年の間に，きわめて劇的にキリスト教化が進行しているわけです。とくにディンカ人やヌエル人の間で顕著に進行しています。ヌエル人のあいだでは，プロテスタントの長老派教会の信者が増加しています。ディンカ人については先ほど述べた英国国教会系のスーダン監督派教会がキリスト教化，宣教の中心になっています。この教会は，ある意味できわめて極端というか，純粋というか，根本主義的な布教のやり方をしています。ディンカ人の伝統的な宗教施設として祭壇があって，そこで牛などの家畜の供犠をするんですが，そういうものを全部壊していくわけです。そういうものを一切破壊して，キリスト教を広めていくという布教の仕方をして，それが広く受け入れられているわけです。それほど極端ではないにしても，南部スーダン人の間で，さまざまな教会がいろんな形で信者を増やしています。

写真⑥　パリ人の集落（東エクアトリア地方，一九八〇年代）

ここで，私が過去10数年付き合ってきた，もともと東エクアトリア地方に住んでいた，パリと呼ばれる人たちについてお話ししようと思います。この人たちは，20年前はこういう村で生活していました（写真⑥）。この写真の村は，1993年に内戦の舞台になって完全に破壊されたので，現在は誰も住んでいません。20年前は，主食であるモロコシ（ソルガム）を栽培し，牛を飼ったり，あるいは魚や野生動物を獲って暮らしていたわけです。しかし現在では，ひじょうに多くの男性，若者たちがSPLAに参加して，20年ちかく戦いを続けています。その人たちとはまた別に，難民としてケニアやウガンダに逃れたパリ人が1000名以上，スー

写真⑦　パリ人女性の葬式を司るプロテスタント教会の牧師たち（ハルツーム，2003年）

写真⑧　葬式の参加者。ほとんどはパリ人（ハルツーム，2003年）

ダンの首都のハルツームに逃げた国内避難民のパリ人も約800人います。ちなみに80年代のパリ人の人口は約1万人くらいでした。故郷を離れた人びとの割合は高いと言えます。

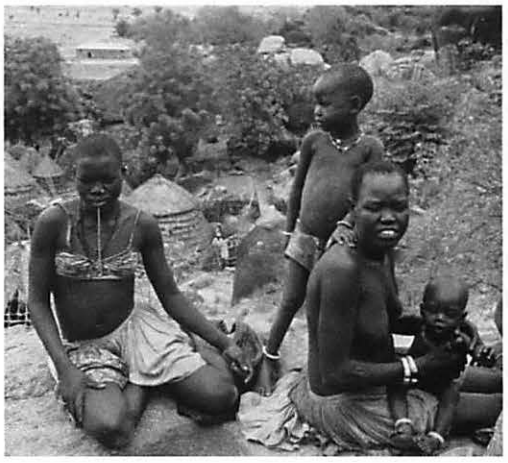
私は2002年以降，ハルツーム郊外に形成された，日干し煉瓦の簡素な住居が延々と立ち並ぶ国内避難民の居住地域に暮らすパリの人たちを何度か訪ねました。そこで驚いたことの一つは，キリスト教の普及です。ハルツームで行われたパリ人の葬式は，キリスト教式でした。家の前に天幕を張って，そこに牧師さんを呼んできて説教とお祈りをしてもらい，聖書の一節を読んでもらって，その後会食をして終わりという形の葬式です（写真⑦⑧）。昔村にいたときは，こういう形式ではなくて，牛の供犠と，モロコシから作った酒を参加者一同が飲むことを中心とする葬儀，儀礼でした。それがおおきく変わっていました。

もう一つ驚いたことは，女性たちの服装であります。ハルツームに住むパリ人の女性たちは，北部スーダン風の，普通はムスリムであるアラブ系の女性が身に纏うような服装をしています。顔や手足をできるだけショールで隠すような服装をしています。かつて村にいたときは，女性たちはこういう服装をしていたわけですね（写真⑨）。ですからこれはきわめておおきな変化です。言語のレベルでも，ハルツームで育ったパリの子どもたちは，アラビア語を第一言語にしています。家庭のなかでも，パリ語ではなくアラビア語を主に使用しているのです。

つまり，ハルツーム在住のパリ人のあいだでは，キリスト教化と，アラブ化あるいはスーダン化が同時に進行しているのです。

ここで私は，イスラーム化が進行しているとはいいませんでした。つまり，彼らがムスリムになったわけではありません。私の知る限り，数百名いるハルツームのパリ人の中でムスリムになった人は一人もいないと思います。しかし，北部スーダン風のドレスコードとかライフスタイル，およびアラビア語は，身につけているわけです。

以上のように，イスラームとのせめぎあいのなかで，内戦中南部人の間にキリスト教がおおきく浸透していった。常識的に考えてみましたら，内戦のなかでのいろんな苦難の経験，家族や友人，知人の死，あるいは何百キロ，時によっては1000キロ以上も，水や食料のない所を歩いて難民になるといった苦難の経験と，聖書で描かれている世界というのがぴったりくるところがあると思うんです。聖書がその苦難の経験に対して説明や救い



写真⑨　パリ人の女性と子ども（東エクアトリア地方，1980年代）

を与えてくれるという，宗教的な側面は確かにあると思います。これに関してよく言及されるのがモーセの出エジプトの話で，南部スーダンの人たちは，内戦中の自らの経験をモーセの出エジプトになぞらえて捉えるということがあるようです。悲劇的な死のあとで，ジョン・ガランをモーセにたとえる言説が流布しているのも興味深いことです。

□内戦下でのキリスト教の役割とは

スーダン内戦下におけるキリスト教とキリスト教会の役割を，三点にわけて整理しておきましょう。

まず，南部スーダンの人たちにとって，キリスト教会というのがほとんどただ一つの信頼できる市民社会の組織だということがあります。国家というものがほとんど崩壊あるいは機能しない状況下で，市民という領域に属する組織をさがしてみると，教会しかないということがあります。

２番目には，キリスト教徒であるということは，スーダンにおいて政治的に主流になっているアラブ人＝ムスリムというアイデンティティのあり方に対抗しうる数少ない方法であるということです。もうひとつの選択肢は，「アフリカ人」というアイデンティティです。ふたつをあわせると，私は「キリスト教徒のアフリカ人」ということになります。

３番目は普遍性です。先ほど同じキリスト教徒であっても，属する教会の違いがエスニックな違いと重なって人々を分断することがあると述べたのですが，それと同時に，キリスト教徒であることが，エスニックな，さらにはナショナルな境界を越えて，普遍的なアイデンティティの拠り所になる場合があります。世界中のキリスト教徒や教会と繋がっていくわけですね。ヨーロッパやアメリカのキリスト教徒へも繋がっていきます。こうした普遍的なアイデンティティは，モダニティや進歩・発展の概念と非常に強く結びついています。例えばここで牧師さんたちが身に纏っている白いシャツとネクタイとズボンと革靴というのが，モダニティの一つの例であります（写真⑦）。

□スーダン人統合の基盤としての旧約聖書

聖書というのが，いろいろな苦難の経験を説明したり解釈するときの参照になっていることをお話しました。最後に紹介したいのは，亡くなったジョン・ガランが2005年１月９日に行った演説の内容です。ジョン・ガランは，ナイロビで包括的平和協定に調印した際に，長時間の熱烈かつ格調たかい演説をしています。内戦で分断され疲弊した国民に，将来への夢を与えた演説でした。そこで彼は，スーダン人はこれからスーダンという新しい国をつくるのであり，その新しい国の新しい国民には，何らかの統一の基盤というのが必要なのだと説きます。普通スーダンという国は，北部人と南部人も違うし，南部人の中でもさまざまなエスニックな集団があって，みんなバラバラだと思うんですが，ジョン・ガランは，いやそうじゃないんだと，スーダン人という国民には歴史的な基盤があるんだと言うわけです。

彼がその根拠として引用したのが，旧約聖書です。例えば「創世記」の第２章にエデンの園のことが書いてあるのですが，彼はそこを読んで，今のスーダンにあたる所はかつてはエデンの園であったのだというんですね。聖書には，青ナイルや白ナイルと解釈できる河が，エデンの園から流れ出す河として書いてあって，これはまさにスーダンのことであると言うんです。

それから，「イザヤ書」の第18章に，エヴァンズ＝プリチャードの『ヌアー族』の扉にも引用されている，以下のような有名な一節があります。

> 「エチオピヤの川々のかなたなるぶんぶんと羽音のする国，この国は葦の船を水にうかべ，ナイル川によって使者をつかわす。とく走る使者よ，行け。川々の分れる国の，たけ高く，膚のなめらかな民，遠近に恐れられる民，力強く，戦いに勝つ民へ行け」（日本聖書協会　1955年改訳）。

聖書などの古典に出てくるエチオピアというのは，一般的に現在のエチオピアの国より広い，サハラ以南，場合によってはインドまで含む地域を指すと考えられています。ガランは，このエチオピアは，現在のエチオピアに相当する地域であり，ここで描かれている「川々の分れる国の，たけ高く，膚のなめらかな民，遠近に恐れられる民，力強く戦いに勝つ民」こそスーダン人であると主張しているのです。

このジョン・ガランという，南部に基盤を置く解放戦線のリーダーが，平和協定が調印された歴

史的な日に，旧約聖書を引用して，スーダンという国あるいは国民の歴史的な一体性を強調したのは大変面白く，かつ重要なことだと思います。つまり，旧約聖書は，キリスト教とイスラームの両方にとって聖典であります。両者は，旧約聖書まで遡ると同じルーツを持っていると考えることもできるわけです。イスラームとキリスト教の関係というのは，ある意味で兄弟のような関係であり，しかし兄弟であるがゆえに，場合によると大変な対立，殺し合いをしてきたという過去の歴史があるわけです。ジョン・ガランは，旧約を引き合いに出すことで，われわれスーダン人は，対立と戦いの歴史をたどってきたけれども，もともとは兄弟なのだと主張したかったのだと思います。

政治的な意味がない純粋な宗教というのがありえるのかどうかは別にして，このスーダンのように，宗教がひじょうに強く政治化されてしまいますと，それを元に戻すということは，不可能ではないのかもしれませんが，きわめて難しいと思います。

今後のスーダンにおいても，キリスト教とイスラームは，いろいろな立場のいろいろな主体によって，国の外も内も含めて，さまざまな政治，経済，社会的な意味づけをされていくことと考えられます。そうした宗教というものの使われ方のダイナミズムを理解することは，すなわちスーダンそのもののダイナミズムを理解することになるのではないかと思います。

時間がおしておりますので，これで私の話は終わらせていただきます。ありがとうございました。

（くりもと・えいせい／大阪大学）